

---

# 恋愛講座

フヌケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛講座

### 【Nコード】

N8993I

### 【作者名】

フヌケ

### 【あらすじ】

純愛はあるの？

浮気はいけないこと？

本命って誰？

そいつはキープ？

失恋からの立ち直り方法って？

漆蘭子<sup>うるし らんこ</sup>は恋愛に悩まされる日々。

どうしたら気持ちは伝わるの？  
それとも…

伝えちゃいけないの？

## 0：憂鬱な四月

別れたい。

恋愛の終わりは、いつも同じような気がする。

あ、この場面見たことある。なんて、神妙な表情の相手をよそに、とても冷静な自分がいる。

けれど、去っていく相手の背中を見つめると、冷めきった現実がじわじわと私の体を包んでいく。

フラれたんだ。

また。

いや、私も最初からそんなに好きじゃなかった。フラれて逆にすつきりした。大きな枷がやっと外れた。

ほら、また強がる。

重たい鎧に身を隠してしまえば、冷めた現実には体を引き裂かれる心配もない。

さあ、鎧被ろう。どんな刃が切り付けてきても、大丈夫なように。

第一志望の大学に落ち、適当に願書を出した女子大に通うことになった四月は、ドキドキもワクワクもない。

周りから、安っぽい励ましをもらい、漆蘭子は大学一年になった。

第一志望が滑った理由は分かっている。大学受験本場前に、突然訪れた別れのせいだ。

別れたい。

まるで、何かの詩の一節を読んでもらったかのような感じだ。

この詩の作者の心情を述べよ、と聞かれたら答えはすぐに書ける。

お前といると疲れる。

癒されない。

楽しくない。

他に好きな子ができた。

思い当たる理由がありすぎて笑える。

恋愛は、互いを思いやることが大事。誰もが知っていること。自分、人より少し負けず嫌いで、社交的でない漆には、難しすぎたんだ。

感情を表に出さない漆の性格上、思いは伝わりにくく、相手には物足りないのだろう。

もっと素直に、感情的に、むしろ、わがままになれたら、結末は違っていたかもしれない。考えても後の祭りだが。

「だからあ、次いこつて!!」

傷ついた心に遠慮なく入ってくるのは、高校から一緒に山河迪だ。長い金髪のストレートヘアがよく似合うのは、きっと彼女が、何に対してもストレートにぶつかってくるからだろう。

悩んだり、迷ったりする人生とは無縁だ。

「次に行ける活力がありません」

臆病な性格のせいなのか、長かったオリエンテーションのせいなのか、体が重たい。

「栄養ドリンクあるよ」

いつも何故、山河の鞆はダルマみたいに膨れているのか気になっていたが、そういうものが常備されていたのか…。

「いないよ」

「何で?! コレでヤル気になれるって」

山河は小声のつもりかもしれないが、ただ漏れた。

こっちが恥ずかしくなってくる。

「なら尚更」

「でもさあ… あんたも顔は美人なんだから、もうちょっと甘え上手になんなさいよ。勿体ないよ」

山河は付け加える。

「男はね、彼女が何でも完璧にこなしちゃうと、気が休まらないの。今の男が求めているのはさ、癒しとか安らぎなんだから」

どうせ程遠い性格ですよ。思わず、机に顔を伏せた漆。

「アレがほしい!とか、手伝ってえ!とか、助けてえ!とか言わないと」

山河が言うと、全部エロく聞こえるのは何故だろう。

「どーせあたしは、そんな台詞言えませんよ」  
鎧を装備する。

「また出たっ! 漆ちゃんお得意のどーせ!…じゃ一生、そうやって分厚い鎧の中に隠れてなさいっ! そこから、幸せが通り過ぎていくのを見てればいいわっ」

残念な性格だと、漆自身も分かっている。けれど、羽目を外す方法が分からない。鎧は、周りが思っている以上に重たいのだ。

幸せは通り過ぎていくかもしれないが、ここに入っていれば、傷つくこともはない。

しっかり者。

冷静沈着。

完璧主義者。

イメージばかりが先行し、周りが予想以上に期待してきた。今まで付き合った男たちだって、期待していたに決まってる。

頭良さそう。

料理上手そう。

部屋が綺麗そう。

頼れそう。

勝手な思考を押し付けてきた。けれど、自分もその期待に応えようとしていた。

失望されなくなかったんだ。

「ほら、漆が見習わなきゃいけない女が来たよっ」

山河が指を指す。

漆がため息をつく。

「おっはよー！どうしたの？マイナスオーラに包まれてるけど」

「ウソッ！！」慌てて体を払い出す山河。

「まどか、漆に新しい男紹介してくんない？失恋からの脱出方法がなんなのか、あんたからも言っちゃってよ」

「Sex？」

ぶっ飛び過ぎだ。と、山河が呟いた。

「いいじゃない！四月は出会いの季節だし、いい男見つけて、見返

したら？」

「あのね、あたしらはあんたみたいに男を衝動買いはしたくないの。好青年を求めてるわけっ」

好青年なんて、高校から煙草ふかしている山河には、最も似合わない言葉だと思う。

「好青年ねえ… あ、あたしの彼氏に頼んでみようか？」

彼氏いたんだ…。

「いい人だから、きつといい友達連れて来てくれるよっ」

「どーせやらせてくれないとポイ捨てするような連中でしょ？」

山河、声がでかいっ！

「そんなんじゃないから！ 迪はあたしの評価をもっと上げて」

努力してみる。山河が目も合わせず答えた。

一糸乱れぬ巻いた髪、完璧な化粧、男たちの視線を釘づけにするのは、道田まどか。大学の入学式で知り合った女だ。

付き合った男は数知れず、メール一通で迎えに来る男や、笑顔一つでご飯をおごってくれる男などなど、イケメンからパシリ専門まで、彼女の交際範囲は広い。

女王バチの彼女の周りには、男が吸い寄せられるように集まり、魅了される。時に甘く、時に辛く、道田の味を一度味わってしまったら抜け出せない。

中毒になる。

「あんな風には絶対になれない」

「大丈夫よ。誰もなれるなんて思っていないから。ただ、ああやって



生きている奴もいるってことだけは忘れないで」

山河が苦笑した。つられて漆も。

どんな人生だったのだろう。

どうしたらあんな人生を歩めたのだろう。

何が違うのだろう。

道田にあって、漆にないもの。

「フェロモンじゃない？」

山河の答えに、頭を叩かれたようだった。

## 1：出会いの四月

行きたくない大学に入り、目標もなく過ごす毎日。

そもそも、自分に目標などあったのだろうか、漆はぼんやりと考える。

もし、あの時別れていなければ

人生は、いい方向に向かっていたのだろうか。

それにしても、自分をこんなに駄目にしてしまう失恋には驚かされる。いや、周りはずっと上手くやっているのだろうか。

別れたって次がある。

いつまでも、フラれたことを引きずるのは、時代遅れなのだろうか。

今、手元に何もなくなった自分が、酷く薄く見えるのは何故だろう。

「考えすぎじゃ、ボケ」

山河は漆の頭をノートで叩いた。

「あのねえ、別に婚約破棄されたわけじゃあるまいし、ましてや高校生の恋愛でしょ？ いちいち凹んでたら、地底まで進んじゃうわよ？！」

いつそのこと、地底で暮らしたい。

「いい、漆っ！」

肩を強く握り、熱血教師のような眼差しの山河は恐ろしい。

「失恋で凹み続けるなんて損だよっ！そうやってる内に周りはどんどん幸せの花を咲かせるのっ！だったらあんたも、クヨクヨしないで早く新しい種を見つけて育てなきゃっ」

確かに、自分の土にはまだ、萎れて干からびた花が根を張っている。

早く抜かなければ、不幸の根は、張り巡らされる。

分かっているのに、土の上にしゃがみ込んだままでいるのは、こんな思いを二度としたくはないからだ。

たかが高校生の恋愛による失恋で、これだけ打ちのめされるんだ…。

今度、自分から本気で誰かを好きになって、そして駄目だったら…。

地底に住む自信がある。

「ああいたいた！」

失恋とか、フラれるとは無縁の道田が満面の笑みでやって来た。ぶん殴りたい衝動に駆られる。

「ねえ、合コンしない？彼に連絡したら、いいよって返事きたからさあ！どう？」

「あたしはいいけど…」

ご機嫌を伺うような二人の視線が、漆に突き刺さる。

「…何？！いいよっ！行くよっ！！」

合コンという響きは、あまり好きじゃない。彼氏を狩りに来まして、アピールしているみたいだから。

それでも、頭のとっぺんから、靴の先まで完璧な山河と道田を見たら、自分もネックレスの一つでも付けてくればよかったと思った。

「引き立て役だな…」

無意識に呟く漆。

「なあに言ってるんのっ」

山河が鋭く睨んだ。

「あんたの最大の武器は、何にもしなくても綺麗な容姿でしょっ！  
着飾ないと引き立たない奴らにとってみれば、あんたの方がよっぽどム力つくわよ」

「山ちゃんも、ム力ついてんの？」

「あたしのどこが着飾ってるのよっ！」

その盛った頭。

「行くわよ、漆っ！種を見つけにっ」

「…おっっ」

さあ、荒れ果てた大地に、花を咲かせようじゃないか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8993i/>

---

恋愛講座

2010年12月13日18時12分発行